

その堅果を食べるのに多くの時間が費やされていたため、多種類の食物に関するサルの採食テクニックを観察することはできなかった。

資料は現在整理中であるので、ここでは結果の概略のみを述べる。観察は10月7日から13日までの1週間におこなった。この間に採食された食物は、果実および（または）種子が11種、葉が1種の合計12種であったが、さまざまな性や年齢の個体が採食する場面を目撃したのは、ブナを含め4種のみであった。これら4種については、個体の成長の比較的早い段階で、採食テクニックが完成されると思われた。個体の成長にともなうテクニックの発達と、完成されたテクニックの地域間比較が、今回集めた資料の分析および今後の資料収集におけるおもなテーマである。

なお今回は利用しなかったが、採食テクニックの検討、とくに口に運ばれたあとの食物処理については、ビデオフィルムによる分析が有効であろう。

自由24：

伊豆大島におけるタイワンサルの研究

川村俊蔵（京都大・名誉教授）

これまでの経験により、12月1～20日、1月23～2月20日の2期、効率のよい研究を行った。第1期内にHa群の餌付けに成功したが、餌の投与量、時間を厳しく制限し、投与場所の選定も含め、サルの遊動等、生活に極力影響しないように努め、たまたま来合わせる僅かな数の住民等にも、注意書を含む説明書類を用意し、悪影響の出ることを防いだ。

餌量が頭割り平均生イモ50gと少いこと、若令層が多いこと等から、個体識別には手間取り、約35匹中で自信あるもの20頭余にとどまり、あとは上智大院生和田千鶴子にバトン渡しし、3月現在ではほぼ完了を見たとの報告をえている。一方写真入りの個体識別簿を作製しており、今後の研究の基礎固めが進行し、完成に近づいている。

Ha群においては、オスの総入れ替えという、劇的な事件があった。昨年群れ外オス撃退の中心であった、2位オスと目されるTomoは、12月時点ですでに群れの外でしか見られなくなっており、オトナオスの数が去年の8～10頭から4頭に減じ、Goroら少なくとも3頭の群れ外オスがしばしば群

れの中心に侵入していた。Taméらの群れオスは明らかに圧迫されていたが、1回だけであるがTaméがGoroに突進し、短時の接触があった。1月にはTaméら4頭はすでに群れ外に落され、Goroらがとって代ったが、新入りのオトナオスは7頭を数える。一方群れ育ちの5才オス2頭は残った。これらのオス間に儀式的調整行動が頻発している。

メスらはオスの変化に独自の対応をしているが、内容は複雑で要約が難しい。群れの分裂はないと考えている。1才未満児を含め、子との接触が稀である理由は何か。ニホンザルの資料と比肩できる精度を今や持とうとしている段階で、種間比較上の問題点が多発しており、今後の展開が大いに期待される。

自由26：

サルが主食とする樹種の結実の年次変動

高槻成紀（東北大・理）

鳥獣にとって果実は重要な食糧であるが、一方果実をつける植物にとってはこれらの動物は種子散布者として重要である。このような動物散布に関して、近年ことに鳥に関する研究が盛んになりつつあるが、サルなどほ乳類に関しては必ずしも多くない。

金華山島は近隣の場所に比べてガマズミが異常なほど多い。このことはサルによる散布が関係している可能性があるので、これを調査した。

サルによるガマズミの利用はガマズミ果実に被いかけの実験により、11月をピークとして、果実数の約50%がサルまたは鳥により持ち去られることがわかった。

一方、サルの糞は林内で最も多く、草原、林縁の順に少なかった。しかし、サル糞に含まれるガマズミ種子数は逆に林内のものが少なかった。その結果としてサル糞に由来するガマズミの種子数は、草原、林縁、林内の順であると考えられた。

ガマズミの実生の密度はガマズミの成個体の多い林縁よりもむしろ林の内部で多い傾向が認められたので、密度調査を行ったところ、ブナ林のうちハナヒリノキの密生する部分で5.6/㎡、ハナヒリノキのない部分では8.8/㎡もの高密度であり、モミ林では0.1-0.4/㎡の範囲にあった。これらはススキ群落の0.04/㎡よりはるかに多く、

またシバ群落では全く発見されなかった。

金華山島にガマズミが多いのは、サルによる種子散布によるところが大きく、このこととモミヤブナなどの林冠形成木の枯死によるギャップ形成がガマズミの生育に寄与しているものと考えた。

自由27:

屋久島の照葉樹林における果実とニホンザルとの関係

野間直彦(京都大・理・植物生態研究施設)
(*現・生態学研究センター)

ニホンザルによる果実(特に液果)の利用の植物にとっての意味を明らかにする目的で、初夏に熟すタブノキとヤマモモを中心に研究を行った。

1) タブノキ・ヤマモモの果実数は短期間で減少した。どちらも6月上旬から熟し始め、6月下旬までではなくなった。果実を摂食し散布する量が最も多い動物はサルで、ついで鳥類であった。

2) サルは液果を未熟なうちから食べる。未熟期には、タブノキの場合、種子をおもに食べ、ほぼ全ての種子が破壊された。ヤマモモの場合は約半数の種子が破壊された。熟期になると、吐き出さか排出された種子はほとんどが健全であり、破壊された種子の平均の割合はタブノキ1.7%、ヤマモモ15.5%であった。また、秋に熟す液果では、シロダモ2.5%、ホルトノキ5.1%であった。サルによる種子破壊率は植物の種ごとに違っており、その差は果実の形態と、大きさ・硬さ・栄養・味・毒性などの種子の特性によっていると考えられる。

3) 液果が発芽能力を示す時期・果肉の有無による種子の発芽率の違いを知るために5期に分けて播種試験を行った。タブノキの種子は5月下旬に播いたものから発芽能力を示し始め、6月下旬に最高となった。すぐに発芽し、休眠性を持たない(10/27の時点で発芽していたものを判定)。種子を播いたものの方が果実を播いたものより発芽率が高く、果肉に発芽抑制作用があることが示唆された。ヤマモモは翌年の春以降発芽する。5月下旬に播いたものから発芽力を持つが、6月下旬に播いたものはほとんど発芽していない。完熟すると強い休眠力を持つことが示された(3/16時点で判定)。果肉の発芽抑制作用は弱かった。サルが吐き出したり排出した種子の発芽率は、一度に

果序全体を採って果肉を取り去った種子を播いたものに較べて、タブノキでは高く、ヤマモモでは低かった。これは、熟期には、様々な熟度の果肉がついている果序から、サルがよく熟した果実を選択して食べているためと考えられる。

液果をつける植物にとってニホンザルは、未熟期には食害者になるが、熟期(発芽力を持っている時期)には多くの種子を健全なまま散布する有効な種子散布者になっているといえる。

自由28:

下北半島におけるニホンザルとタイワンザルの接触を防止するための研究

森 治(下北野生生物研究所)
和田 久(第一田名部小学校)

1971年7月に開園された「むつ湾観光牧場」に展示動物として移入されたタイワンザルの群れ約40頭は、1975年、経営不振による閉鎖後もその跡地に飼育されていた。飼育といっても海岸線と国道にはさまれたクロマツ植林に放し飼いにされ、柵から自由に出入りできる状態にあった。

一方、下北半島頭部にはニホンザルが生息し、1970年に北限のニホンザルとして天然記念物に指定されている。この両者の生息地の距離は数十kmに過ぎないことから、タイワンザルの群れを離れたオスザルが北上し、ニホンザルと交雑する危険性が数年前から指摘されてきた。

1989年8月から9月にかけてタイワンザルのハナレザルが北上し、むつ市内で写真撮影され、県は重い腰を上げた。同年9月6日と9月19日に各1頭が森らによって捕獲され、日本モンキーセンターに移送された。

1990年4月から、これまでの情報にもとづく聞き込み調査を行いながら、電話による情報網づくりをして、タイワンザルの北上を未然に防ぐ態勢を整えた。一方、ニホンザルの群れに関しては、これまでより広範囲に、接触の可能性の高い地域に重点をおいて調査した。

同年5月、タイワンザルの所有者は飼育地を南東方向に3kmほど離れた林中に移転し、飼育地から出歩くことのないことを宣言した。しかし、以前と変らぬ放し飼いで、周辺の土地利用、植生の調査結果からハナレザルの北上、南下の可能性は何ら軽減されていないことが判明した。